様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　５ 月 １４ 日現在

機関番号：３４４１９
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2019～2021
課題番号：１９Ｋ００４８６

研究課題名（和文）戦中・戦後期における科学的精神と反文明的思考の関係：シュルレアリスムとその周辺

研究課題名（英文）The relationship between scientific mind and anti-progressive thinking : surrealists and their contemporaries

研究代表者
有馬　麻理亜（ARIMA, Maria）

近畿大学・経済学部・准教授

研究者番号：９０５９４３５９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では大戦間期において神秘主義やオカルトなどに関心を持った科学者を取り上げ、彼らの科学的精神がいかにこれらの反文明的思考と両立していくのかという問題に取り組んだ。なかでもシュルレアリスム運動に参加した医師ピエール・マビーユの作品や研究を分析した結果、1930年代のフランスで流行した医学ホーリズムの重要性を再発見することができた。彼らホーリズム医学者たちの通俗科学的作品は当時の知識人に影響を与えていた。また、その多くのホーリズム医師が研究の特性もあってファシズムに引き寄せていったにもかかわらず、マビーユは反ファシズムを貫いたホーリスト医師の稀な例であることも示すことができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は科学的精神と反文明的思考の関係を足がかりとして、「20世紀の知識人や科学者がいかに戦争とモラル」という問題に直面したのかという普遍的な問題に取り組むという学術的意義を持っている。そしてホーリズム医学者のなかには（生物）類型学や優生学など人種差別に結びつく学問が多く、実際多くの学者がファシズム政権下で活躍した者が多かった。このような知の歴史に再び着目し、歴史に学ことは今日を生きる私たちにおいても重要であり、そのような点において社会的意義があると考える。

研究成果の概要（英文）：In this research, we focused on the scientists interested in occultism or spiritualism in interwar period to examine the relationship (the compatibility) between scientific mind and anti-progressive mind. As an ideal example, we explored the works of Dr. Pierre Mabille, who participated in the surrealism movement and we discovered the emergence of the medical holism movement of the 1930s in France has an important influence on the intellectuals in this period. We also showed while most of medical holists are near to fascism, Dr. Mabille was the rare example of left-wing holist.

研究分野：フランス文学（20世紀）

キーワード：戦争と科学　医学ホーリズム　ピエール・マビーユ　アレクシス・カレル　シュルレアリスム

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

⑴　原点：革命的理想主義の多様な形態と反文明的思想

これまで報告者はアンドレ・ブルトンにおける理想主義の形態や、同時代の作家における理想主義のあり方を分析してきた。なかでも、ジョルジュ・バタイユとブルトンとの比較は重要な成果に繋がった。しばしば対立関係にあると論じられた二人は、ヘーゲル哲学の受容を通じてなんらかの理想主義を共有し、さらにファシズムの台頭期には両者ともフロイトとマルクスをいかに受容するかという問題に取り組んだ。そこで、報告者はファシズムの危険性を指摘した同時代人ウィルヘルム・ライヒを加え、三者におけるフロイトとマルクス主義の受容のあり方を比較した。その結果、三者の抱く革命的理想主義は、戦後になると「聖なるもの」（バタイユ）、「オレゴンエネルギー」（ライヒ）、秘教（ブルトン）といった、神秘的なものへと繋がることが分かった。そこで「理想主義は既存の文明への反抗（反文明的態度）として神秘主義へと導かれるのではないか」という疑問を抱いた。

⑵　大戦期から戦後にかけてのシュルレアリスムとピエール・マビーユの再評価

この疑問に基づき、報告者は戦後におけるブルトン思想、特に彼が関心を抱いた秘教の問題に取り組んだ。社会思想と秘教について論じたブルトンのハイチで講演を分析することになったのだが、ブルトンをハイチに招聘し、講演内容にも影響を与えたのがピエール・マビーユであることに気づいた。マビーユは医師を続けながらシュルレアリスムに参加した異色の人物である。またブルトンにブードゥの実践を紹介するなど、魔術や神秘主義にも精通していた。さらに政治運動にも熱心で、ブルトンよりも過激な面があることがわかった。申請者はマビーユその人に関心を持ち、彼の作品や彼に関する研究を少しずつ調べ始めた。すると、彼がナチスに利用されることになる優生学に影響を与えたアレクシス・カレルの『人間、この道なるもの』に対抗すべく、新たな人間論・文明論を提示しようとしたこと。それと同時に彼が独自の形態学を構築しようとしたことを知り、「大戦期間のシュルレアリスムにおける科学（通俗科学も含む）」という主題に取り組みたいと考えた。マビーユが参加している医学系雑誌には、神秘主義的論考が掲載されていることも興味深い。このようにマビーユをきっかけとして、30 年代以降のシュルレアリスムの周辺と科学（通俗科学も含む）との間に重要な関連性が見られることがわかった。

２．研究の目的

先にあげた状況を踏まえて、報告者はなぜ大戦間期から戦後までの間にカレルやマビーユといった医師（科学者）が人間学や文明論を提示しようとしたのか、そして彼らはいずれも何らかの形で神秘主義やオカルトに関心を抱いていたことから、彼らの科学的精神がいかにして反進歩的な思考、あるいは後に「対抗文化」と呼ばれることになる思考と両立しうるのかを明らかにしたいと考えた。さらに、このような精神のあり方にファシズムや戦争といった時代背景が影響を与えたのではないかと想定し、このような歴史的背景が科学と神秘主義やオカルトという一見正反対の知を結びつけることを可能にしたのではないかという問題を解明したいと考えた。そこで具体的な二つの問いをたてた。

⑴　問１（知やモラルの問題）：マビーユを始めとする医学者や科学者のなかには魔術や神秘哲学といった既存の文明観に対する対抗文化（反文明的思考）に関心を持つ者がいる。彼らはいかにしてこの反文明的思考へと接近していくことになったのか。彼らには共通する知的関心はいかなるものだったのか。そしてこれらの二つの一見相入れない思想はいかにして両立したのか。

⑵ 問２（背景としての歴史、イデオロギーとの関係）：大戦間期から戦後にかけて、一部の知識人にマビーユやカレルと共通する「反文明的思考」への興味が見受けられるとすれば、それはファシズムの台頭や戦争といった歴史に影響を受けたものではないだろうか。また、カレルの『人間、この道なるもの』が世界的なベストセラーになったことを考慮すれば、彼らの思想を受け入れる側にも歴史的・思想的背景が関係しているのではないか。

このような問いに答えることで、「いかなる条件のもとで科学的知は魔術や民間伝承といった反文明的思考」に結びつくのかという問題を扱うことだけではなく、シュルレアリスムとその周辺を例に「20 世紀の知識人や科学者がいかに戦争とモラルという問題に直面したのか」という普遍的な問題に取り組みつつ、優生学という今日にも傷跡を残すような科学に対して彼らがいかなる態度を示したのか。大戦間期から戦後という特殊な事情を抱えた時代において、科学精神はどのように展開したのか。彼らが原子爆弾投下後、アウシュヴィッツ後の世界に対してどのような文明観を抱いたのかなどといった、今日の私たちについても重要な問題につながると考えた。

３．研究の方法

これら二つの問いに取り組むため、次の方法によって研究を進める計画を立てた。

⑴ 分析対象の絞り込み：いままで研究を進めてきたマビーユやカレルと同時代に活躍していた科学者や医学者が何を専門とし、どのような問題に取り組んでいたのか、またどのような傾向を持っていたのかを明らかにすることで、当時の知的流行や傾向を把握するとともに分析対象を絞り込む。

⑵ 時代背景との関係：カレルのベストセラーが出版された 1935 年はまさにファシズムの台頭期であった。そしてヴィシー政権下においてカレルは政府の援助を受けて研究所を設立するにいたった。一方、また表立った政治的活動を行なっていなかったマビーユはこの時期から政治的雑誌に連載を持ち始める。そこでファシズム（あるいはそのようなイデオロギー）と⑴で絞り込んだ科学者の関係を探ることで、彼らの知的動向と歴史の関係を明らかにする。

４．研究成果

以下、このような方法をもとに得られた主要な成果や、これらの成果の国内外での位置付け、また今後の展望を述べる。

⑴ マビーユの人と作品：

方法⑴で示したように、マビーユやカレル、さらに彼らと同時代に活躍した科学者の絞り込みを行うべく、ピエール・マビーユの人と作品を分析した（主に関係する報告者の論文：「異端の医学者、ピエール・マビーユ：「人間の科学」から「全体論的人間学」へ」）。

この作品に関係して、彼がアレクシス・カレルの『人間、この未知なるもの』に対抗して発表した文明論や人間学を分析しつつ、彼の科学者としての研究がいかなるものであったのかを調査した。その結果、興味深いことがいくつか判明した。そもそもマビーユとカレルには「人間の科学」を打ち立てるという共通の目標があったこと。そしてこの「人間の科学」とは、あらゆる分野の知を「統合 synthèse」することが必要であると考えていることも共通していた。この「統合」はまた、フランスにおけるホーリズム医学のキーワードである。

さらに、マビーユの医学者としての論文や人間関係を調査したところ、間接的に両者が接点を持っていることが判明した。その鍵となるのが、1930 年代にフランスでも流行を見せる医学ホーリズム（holisme médical）である。この分野の先行研究によると（Cf. C. Lawrence and G. Weisz, *Greater than the parts : Holism in biomedicine, 1920-1950,* Oxford university press, 1998)、ホーリズム医学は、体質医学、心身医学、社会医学、ホメオパシーなど多様な形態を持ち、国によっても発展の仕方に違いがある。先行研究によれば、1930 年代フランスでは、ホーリズムより「統合」「新ヒポクラテス主義」「ホメオパシー」など、別の名前のもとで流行していた。伝統的でアカデミックな医学というより、マージナルな異端の学派であるといってよいだろう。興味深いことに、マビーユの長年の共同研究者とも呼ぶことができる M.マルティニーが、この先行研究でホーリズム医学者として挙げられていた。マルティニーとマビーユは形態・生理学研究学会設立し、雑誌を刊行していた。さらにこの研究会の名誉会員である生物類形学の創始者ニコラ・ペンデは、カレルがイタリアまで会いに行った研究者であったこともわかった。また先に上げた先行研究では、カレル自身はホーリズム医学者として分類されてはいないものの、ホーリズム医学者の尊敬の的であった（カレルの死後のことになるが、マルティニーの共著ではカレルの論文が最初に掲載されている）。

マビーユに関する先行研究では、反ファシズムを表明していたマビーユと、ナチスに作品が好意的に受け入れられたり、ヴィシー政権下で援助を受けたりするなど、ファシズムと近かったカレルとは政治思想的には正反対だとされる。たしかにマビーユは反ファシズムを表明しており、戦後の作品では、カレルの優生学に基づく差別思想を批判している。しかし、一方で書簡などからもマビーユがカレルの研究所に関心を抱いていたこともわかっており、単なる対立という図式では表せない関係だということを証明することができた。

⑵ マビーユの一元論的思想と医学ホーリズム

そもそも医師としてのマビーユを論じる研究がないことと、一般的に彼はシュルレアリスム運動に参加した医師、秘教や魔術などに精通していた人物としてしか扱われていなかったことから、マビーユ自身をホーリズム医学者とする先行研究はない。しかし、先にあげたように調査によって、彼がホーリズム医学者たちと共に研究を行なっていたこと、またマビーユ自身、ホメオパシーに関する論文を発表したり、ホーリズム医学者の書籍に好意的な書評を書いていたり、ホーリズム医学者たちに通じるような宇宙と身体のアナロジーに基づく人間学を発表していた。その結果、マビーユをホーリズム医学者と位置付けることができた。

このホーリズム医学はその元となる思想である全体論的思想も重要だと思われた。マビーユは一元論者を自認していたが、彼が提示しようとする一元論的世界観は、物質と精神や世界と人間の統一、二項対立的要素の解消だけではなく、「より大きな生 vie plus large」を目指すもので、これは部分の統合が全体より大きいというホーリズム的世界観と呼応している。そもそも、ホーリズムはヘーゲル哲学に影響を受けており、デカルト的二元論を乗り越える意義も持っていた。つまり二元論を乗り越えようとし、ヘーゲル哲学に影響を受けていたこと、そ

して秘教やオカルティズムにたいする強い関心は、ホーリズムという哲学に接近する要素となりうることが判明したのだ。現在このような思想の発展を抱いた同時代人がシュルレアリスムをはじめとする作家や思想家にいないかを調査している。

⑶ 1930 年代という時代背景

マビーユ作品を分析することは、先にあげた方法⑵（時代背景との関係）においても、成果をもたらした。それは 1930 年代の多様な政治・思想的グループの再発見である。ホーリズム医学者には右翼やカトリックが多く、先にあげたように、カレルなどヴィシー政権下で影響力を持つ者もいた。同じ分野の研究に関わりつつも、反ファシズムを表明し、亡命までしたマビーユの政治的思想の解明が必要だと思われた。

そこで、マビーユがスペイン内戦に影響を受けて執筆した『リジューのテレーズ』（1937）を分析した（関係する報告者の論文：「ピエール・マビーユ『リジューのテレーズ』（1937）―政治・思想的パンフレットから幸福論へ」）。この作品は反教権主義者で反資本主義者であるマビーユの政治的パンフレットと位置付けられているが、調査や分析によって、それ以外の特徴を提示することができた。例えば、この作品はマビーユが聖人テレーズを論じるにあたって、（ホーリズム）医師として当時の科学知識をもとに彼女を診断した記録であることや、トリックが勢力拡大のためにテレーズを神話化し、ファシズムにまで協力したことへの抗議として、作品で聖テレーズを脱聖化し、「滅びゆく西洋文明の象徴」という対抗神話を提示していたことだ。

他方、この作品がスペイン内戦に影響を受けて書かれていたことから、当時のマビーユの政治活動を見直すことで、1930 年代後半に生じた左派の政治的小グループの存在（G ベルジュリが率いるフロンティストや、P・エステーブのマキシミスム）を再発見し、マビーユを数少ない左翼系ホーリズム医学者として位置付けることができた。

⑷ これらの成果の国内外における位置づけ・今後の展望

フランスにおいて、マージナルなグループとはいえ、ホーリズム医学が流行していたことを再発見したことは重要な成果である。彼らの専門領域は多様であるが、多くがファシズム的なものと親類性を有し、イデオロギーと科学、政治と科学との関係をさらに深めていく一つの方向性を獲得することができたからだ。また 2021 年フランスで提出された Léo Bernard の博士論文（*Hippocrate initié : Courants ésotériques et holisme médical en France durant l'entre-deux-guerres*）は、コロナ禍で渡仏ができず、内容が確認できないものの、この時期のホーリズム医学と秘教の関係を取り上げているものとみられる。すなわち本研究課題とほぼ同じ時期に同じ現象が注目されていたことからも、国外におけるこの本課題の主題と共通する要素が着目されている。このような同時進行で発展している研究を踏まえて、今後はオカルティズムと医学の関係についても調査を深めていきたい。

また、研究成果を通じて新たな問題も浮上した。それが「戦時下における『聖なるもの』の表象」という問題である。カトリック系左翼 E・ムーニエや詩人クローデル、右翼のモーラスなど、多様な思想の知識人が聖テレーズを取り上げていた。マビーユはカトリックが勢力拡大のためにテレーズを神話化し、ファシズムにまで協力したことへの抗議として、作品で聖テレーズを脱聖化し、「滅びゆく西洋文明の象徴」という対抗神話を提示した。ファシズムの台頭から第二次世界大戦開戦までの動乱の時期、知識人がいかに「聖なるもの」に関心を持ち、どう対峙したのか、例えば対抗神話やプロパガンダなど、その形態はいかなるものだったのか。彼らの思想・信条の違いによってその表象はどう変化するのか。今後はこのような問題にも取り組むつもりである。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 有馬麻理亜	４．巻 11 (2)
２．論文標題 異端の医学者、ピエール・マビーユ：「人間の科学」から「全体論的人間学」へ	５．発行年 2020年
３．雑誌名 近畿大学教養・外国語センター紀要（外国語編）	６．最初と最後の頁 47～64
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 有馬麻理亜	４．巻 10(2)
２．論文標題 眼差しの交わるところ--ポエムーオブジェ『行為者A・B の肖像』（1941）をめぐる一考察	５．発行年 2019年
３．雑誌名 近畿大学教養・外国語教育センター紀要．外国語編	６．最初と最後の頁 39～60
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 有馬麻理亜	４．巻 12(2)
２．論文標題 ピエール・マビーユ『リジューのテレーズ』(1937)ー政治・思想的パンフレットから幸福論へ	５．発行年 2021年
３．雑誌名 近畿大学教養・外国語教育センター紀要．外国語	６．最初と最後の頁 85-102
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 有馬　麻理亜
２．発表標題 自画像としてのポエムーオブジェの可能性：『行為者A・Bの肖像』（1941）を一例として
３．学会等名 関西シュルレアリスム研究会
４．発表年 2020年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関